

## (論文内容の要旨)

前青年期は、児童期から青年期へと実存的な次元での変化を内包した、発達の転換期である。変化を内包するこの時期は危機を孕み、心理療法の対象ともなる。Sullivan, H. S. (1953)は、前青年期における同性同年輩との親密な友人関係を“chum -ship”（親友関係）と名付け、この関係が、それ以前の発達のゆがみを修復すると同時に、以降の心理発達を促進するとして、心理治療的な観点からも重視した。本論文では、この chumship がどのような側面において発達促進的であり、心理治療的であるのかを明らかにするため、調査研究や事例研究など多様な研究法に基づいて検討された。

第1部(第1章～第4章)では、一般的な発達過程でみられる chumship について検討された。第1章では、前青年期や chumship に関する先行研究が概観され、chum -ship が、この時期の自己形成の担い手として重要な役割を果たすものであると考えられた。第2章と第3章では、親しい同性友人関係の心理発達上の意義については様々な実証的研究が行われてきた。しかし、非言語的な感覚次元での自己との関連についての研究はなされていない。第2章では、この点について調査を行った。その結果、前青年期において特定の親しい友人に内面を打ち明ける体験をしたことが自らの安心感や温かな感覚と関連すること等が示された。第3章では、前青年期の同一性と親しい同性友人に対する感情との関連について、大学生を対象とした調査研究を行った。とくに、chumship に示されるような、親しい同性友人の指示的な側面だけでなく、親しい間柄であるがゆえに引き起こされうる羨望など、葛藤的な感情についても考慮し、多面的に捉えた。第4章では、同性友人関係に関する研究結果の中に顕著にみられた性差をとりあげ、その特徴を描き出すとともに、このような背景にあると考えられる心理力動について、精神分析的観点から考察された。

第2部(第5章～第8章)では、臨床実践場面における chumship が取り上げられた。第5章では、前青年期の同性友人間に展開される世界、とりわけ質問紙調査では掬い取ることが難しい間主観的な世界について、学校教育現場での子どもたちとの関わりの中で見られた現象を通して、検討された。第6章～第8章では、心理療法の中で生じる関係について、chumship という観点から検討された。第6章においては、chumship の心理治療的側面について、理論や先行研究を通して考察するとともに、前青年期の心理療法においてセラピストに求められる姿勢について論じられた。第7章、第8章では、成長の過程で chumship を結ぶことの難しい状況にあった子どもたちの事例について、chumship 形成という観点から検討された。第7章では、教室に入れないことを訴えとして来談し、基盤となる自己の弱さのうかがわれた思春期女子との心理面接過程が示され、セラピストとの関係を中心に検討された。面接

終了後の経過の中で、年下の友人ができたことから、面接過程におけるセラピストとの関係を通して、クライアントの中に“友情がつくられる原材”であるところの“ひとりでいられる能力”(Winnicott, 1965)が育ち、chumshipを形成するための基盤となる力が形成されたと考えられた。第8章では、視覚障害の女兒とのプレイセラピーについて、セラピー関係の変遷を中心に、心理療法場面におけるchumshipの展開という観点から考察された。以上の事例を通して、chumshipの基盤となると考えられた“一人でいられる能力”とは、“両者とも一人でいるのだろうけれども、しかもお互いそこにいることが両者にとって重要である”(Winnicott, 1965)のような、他者と共にいる中で生成されるものであることが示唆された。このような二者関係、つまり、融合と分離の間にあり、両者が共に遊ぶことのできる“可能性空間”を生きる関係の中に、chumshipの本質があるのではないかと考えられた。

|     |       |
|-----|-------|
| 氏 名 | 須藤 春佳 |
|-----|-------|

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、前青年期に生じる親友関係に関する心理臨床学的研究である。心身の大きな変化に伴う危機を内包した前青年期について、Sullivan, HS(1953)は、特定の同性同年輩との親密な一対一の友人関係 chumship が重要な意義をもつことを明らかにしている。彼は、この友人関係が、過去の発達の変質を修復し、心的発達を促進するとして、その心理治療的な意義を強調したが、それが自己形成にどのような意味をもつかは論じていない。また、彼の論は男性において考えられたものであって、女性については言及されていない。他方、同性友人関係の心理発達意義に関する実証研究は、従来からもなされている。しかし、それらは、頻度などの客観的基準による数量的調査研究が主であり、体験の内実には十分に検討されてこなかった。本論文では、以下のように、chumshipがどのように体験されたか、自己形成との関連に焦点を当てた調査がなされるとともに、発達過程において、chum-ship 体験が困難であった場合の心理治療例を提示し、こうした関係が生まれる心的基盤を明らかにする研究がなされた。

第1部は、一般的な発達過程にみられるchumship に関する研究である。理論研究に基づき、この時期の自己形成の担い手として重要な役割を果たすとの観点から、質問紙と投影図版を独自に作成して、前青年期以降の非言語的な次元での自己感覚や自我同一性との関連について調査が成された。結果として、まず、前青年期では、友人に内面を打ち明けた体験が自己の安心感や温かな感覚と関連すること等が示された。次いで、青年期の自我同一性について、羨望など葛藤的な感情も含めて多面的に捉えた調査を行った結果、chumship 体験の優位な群は共感性の強いこと等が明らかにされた。男女の性差については、chum 体験は、男子では主体性のある自己を実感することと関連するが、女子では主体性は生じず、相手との一体感を伴う関係になること等、示唆深い結果が示された。性差が生じる背景の心理力動については、原初の愛着対象である母との生別の異同による同性との関係の持ち方の相異に関する精神分析理論を基に詳細な考察がなされている。

第2部では、心理臨床の場でchumship がいかに生じるか検討された。質問紙調査では掬い取れない同性友人関係の間主観的世界について、まず、学校教育の場での児童の直接的な関与観察がなされた。3組の友人間の興味深い遊び―「見えない世界」の 創造、描画の協同制作、身体感覚の共有等―が取り上げられ、それらは、Winnicott, DW のいう「可能性空間」つまり「内的現実と外的世界の間の中間領域」の観点によって理解し得る現象であると論じられた。さらに、同一化に生じる病理等に関して、Lacan, J の鏡像段階論をはじめとした諸理論を基にした考察を踏まえて、2事例の心理療法過程が提示され、セラピストとクライアント関係がchum-ship の観点から検討された。

第1例は、教室に入れないことを主訴に来談した思春期女子との3年間の心理面接過程、第2例は、未熟児網膜症による視覚障害女児との3年間のプレイセラピー過程である。2事例は、3年の面接過程を経て、現実の場で友人関係が生まれた。心理面接において、他者とともに居るなかで「一人でいられる能力」が生成され、それがchuship の基盤となったと論じられた。

以上のように、本論文は、前青年期という重要な発達段階に生じるchumship について多様な研究法を用いて探究が深められており、その成果は高く評価できる。chumship を狭義で捉えるか広い意味で捉えるか、また、現実的なchum とセラピー関係で活かすchum の相異、それら全体を捉える理論的観点や概念の整理、近代以前のchumshipの検討など、研究のさらなる方向性がさまざまに指摘されたがそれらはむしろ本研究の意義を示すものであって、博士論文の価値を損ねるものではない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成20年6月26日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。